

東進する剥片尖頭器(I)

—資料集成と基礎的整理—

松本 茂

1. はじめに

始良火山噴火後、急速に九州に拡がった剥片尖頭器石器群の源流が、朝鮮半島に求められそうだという認識は、およそ1980年代後半以降には日本の学界に広まっていた。九州と半島の地理的近接性を踏まえれば、最終氷期最寒冷期に狭まった海峡を渡って彼の地から九州へ剥片尖頭器が伝えられたと考えることは自明の理ともいえた(松藤1987)。他方で、その拡散の波紋が列島の東へは伝わらなかったのかどうか、その可能性の探究もありうべき問題意識の一つだったといえる。列島各地の発掘調査が進むにつれ、九州と半島以外の地域にも「剥片尖頭器」の出土を示すドットが点散的に落とされていった。

上記の調査・研究の流れを引き継ぐかのように、2000年代には進展著しい黒曜石原産地研究の成果も取り込み、日本海を巡る人と物の交流網という枠組みにおいて、半島のスンベチルゲと列島の剥片尖頭器の拡散・伝播が取り沙汰されるようになる(佐藤2000、安蒜2005・2007・2009、須藤2010、張2009、장용준2010、Chang2013)。古本州島の日本海沿いを北上した国府石器群と関連させて、剥片尖頭器(それを含む西南日本の石器群)の東進あるいは北進を評価する論点が浮上したのも同じ頃だった(栗島2005、柳田2006、鹿又2012、伊藤2014)。さらには、AT降灰後の九州という時空間に強く結びつけて理解されてきた列島における剥片尖頭器石器群の展開を、AT降灰を遡る時期の東北日本にも見出し相対化する、すこぶるラディカルな議論も半島の研究者によって投げかけられた(李2014、張2017)。

剥片尖頭器石器群を巡る、このような論点の多様化に対し、意外にも九州の研究者は積極的に反応していない。ほとんど唯一の例外が木崎康弘であり、始良火山噴火を遡る時期の東北日本の剥片尖頭器の類似例に関しては“臨機的発生”と評価しつつも、AT上位の関連資料については九州からの“東方波及”を積極的に評価してきた(木崎2005・2017・2020)。同じく九州をフィールドとする筆者も、木崎に倣い如上の研究シーンに斬り込んでゆきたいと考えるが、一歩立ち止まって検討を済ませておくべき課題もあるかに思われる。最初に触れた、九州・半島を除く地域の「剥片尖頭器」分布図の今日的評価と総括をその筆頭に挙げたい。

各地の研究者が、見慣れない石器の出土を自らのフィールドで目にしたとき、どのような属性に着目して、それを剥片尖頭器と呼んだのか。あるいは、九州や半島の研究者が他地域のどのような資料に注目して、それを剥片尖頭器あるいはスンベチルゲと呼んだのか。その結果を1枚の分布図として描き、時間軸を付与したうえでとっくりと吟味してみることは、環日本海旧石器文化回廊(安蒜2009)に代表されるマクロレベルの仮説と、九州の対半島関係を軸とした相対的にミクロな地域モデルとを対比し、議論を賦活しあうためにも有意義な作業だと考える。資料集成を主とした本稿の前半を(I)とし、その皮切りとしたい。

2. 九州島・朝鮮半島をのぞく地域の剥片尖頭器および関連資料

データベース『日本列島の旧石器時代遺跡』(以下JPra-DBと表記：日本旧石器学会2010・Web版)から、九州以外で「剥片尖頭器」の項目に「○」・「△」が付された遺跡を抽出し、さらに報告書・個別研究等で剥片尖頭器および関連が言及された事例も集成した(第1～10図)¹⁾。あわせて、ロシアと中華人民共和国において関連が指摘された事例も添えた(第11図)。

(1) 中国地方(第1図)

ながます
長柵遺跡第2地点(山口県宇部市：採集資料)(山口県旧石器文化研究会1985)

1は基部加工のナイフ形石器として紹介された。実測図から、基部の抉りは浅いものの、剥片尖頭器の範疇に含められる可能性がある資料と判断した。安山岩ないし凝灰岩を用いており、風化が著しいとされる。実見できておらず、記載は報文に拠った。なお、松藤和人もかつて論考の分布図(松藤1987・1989)に、後述の「常盤池」とともに「長柵」の2箇所を山口県域の剥片尖頭器出土地点として落としたが、具体的な資料については図示・言及していない。

しらつち
白土遺跡(山口県宇部市：採集資料)(山口県旧石器文化研究会1983)

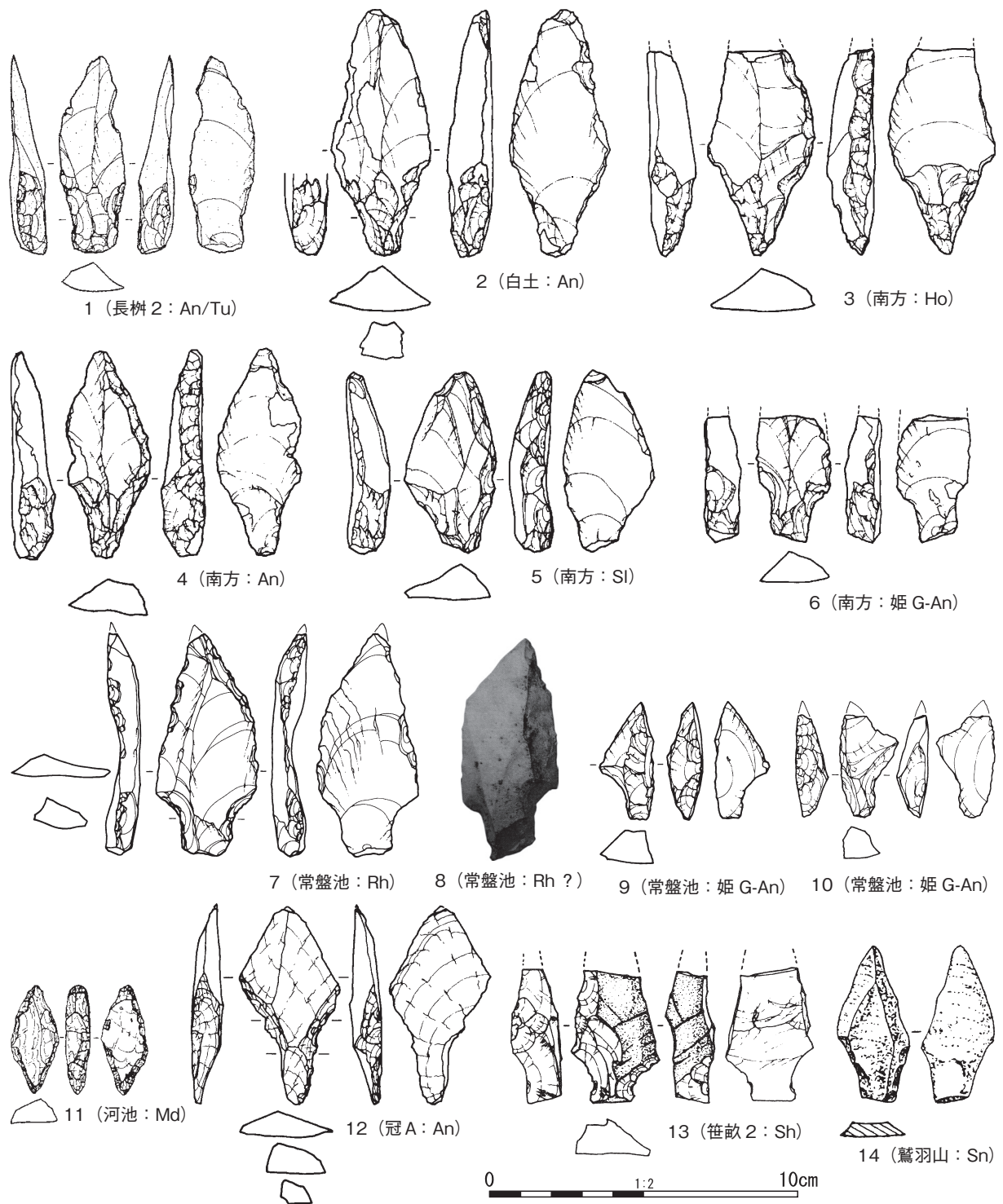
2は基部を中心に粗い調整を施し、素材である縦長剥片の打面は残置される。右側面に顕著ではない稜上加工が報告されている。実見できておらず、記載は報文に拠った。

みなみがた
南方遺跡(山口県宇部市：採集資料)(山口県旧石器文化研究会1986)

3は左側縁上半部に素材剥片の縁辺を残す。基部を尖鋭に作出し、基部裏面に平坦な調整を施すことで素材剥片の打面は完全に除去されている。背面構成について、右側の打面側の剥離面は、実測図では打面側のリングが表現されているが、剥離方向が逆である可能性も看取された。安山岩または玄武岩製と報告されていたが、実見時の所見ではホルンフェルスの可能性を指摘したい。表面が非常に滑らかに風化している。4も左側縁上半部に素材剥片の縁辺を残す。基部は裏面側からのブランディングのみによって整形され、素材剥片の打面を小さく残す。5は黄白色に風化が進んだシルト岩製で、やはり左側縁上半部に素材剥片の縁辺を残す。基部を折損するが、本来は3・4と同様に、比較的尖鋭であった可能性がある。6は上半を欠損するが、現存部分で確認する限り、九州の剥片尖頭器に普遍的に観察される技術形態を示す。ただし、基部に残る素材剥片の打面は複剥離打面の可能性がある。姫島産のガラス質安山岩を用いる点の特筆される。

ときわいけ
常盤池遺跡A・B・D地点・中ノ洲地点(山口県宇部市：採集資料)

7は1959年に高橋慎二によってA地点で採集された剥片尖頭器であり(三浦2020)、当初は「サイドスクレイパー(削器)」として報告された資料である(潮見1968)。かつて頁岩製と報告されたが(山口県旧石器文化研究会1989a)、実見では祖母・傾系の流紋岩に類似する特徴を認めた。残置された素材剥片の打面は単剥離打面である可能性が高い。8はD地点(地区)からの採集品であり(小野田市歴史民俗資料館1998)、モノクロ写真のみからの判断になるが、やはり流紋岩製の剥片尖頭器の可能性が高い。9・10はナイフ形石器として報告されたもので(山口県旧石器文化研究会1989a・b)、狸谷型ナイフ形石器と同様ないし類似した技術形態的特徴が看取されるため(岩谷1998)、関連資料としてとりあげる。9はB地点からの採集で、右側縁と左側縁下半部にブランディングを施し、切出形に仕上げる。二次加工痕は石質を反映し、粗い外観を呈する。下端部は折損



第1図 中国地方の剥片尖頭器および関連資料

か意図的な加工か判断し難い。厚手の素材を横位に用いる。10は中ノ洲地点採集で、正面左側縁および右側面下半に二次加工を施し、切出形に仕上げる。右側縁の調整はほぼ1回の加撃による。9・10とも、姫島産のガラス質安山岩と判断される。なお、同石材を用いた切出形石器は神崎遺

跡Ⅲ地区でも2点採集されている(三浦2016)。

河池遺跡(山口県岩国市:採集資料)(石丸編1987)

JPra-DBでは△が付される。「両縁背つき尖頭器」と報告された11が該当資料と思われる。弥生時代の集落遺跡の土坑ないし表土中からの出土で、泥岩製と報告される。サイズも小さく、写真・実測図から判断する限り剥片尖頭器の範疇には含まれないと判断する。

冠遺跡A地点(広島県廿日市市:発掘資料)(広島県教育委員会1983)

松藤和人は剥片尖頭器の分布東限として冠遺跡群に言及し分布図に点を落とした(松藤1987・1989)。ただし、具体的な出土地点や資料は図示・言及していない。加藤晋平は第1ユニットから出土した23点のナイフ形石器のうち1点を、中国地方の剥片尖頭器の事例として採り挙げた(加藤1989)。加藤が長崎県中山遺跡の剥片尖頭器と並べて紹介した12は、実測図および写真から判断する限りで、幅広ないし横長剥片を斜位に用い、器体下半の両側縁にブランディングを加えて、尖鋭な基部を作出している。一般的な剥片尖頭器やスベチルゲとは器長に占める基部の比率が大きい点でプロポーションが異なる²⁾。その後は、中国地方の剥片尖頭器の事例として採り挙げられていない(多田1997、藤野・多田2010)。当該石器群は総体的には国府石器群と見なされ、三好元樹は南関東のV層段階に相当すると評価する(三好2014)。

笹畝遺跡第2地点(岡山県真庭市:採集資料)(白石1990)

13は表土との漸移層を挟んで下位の黄褐色火山灰層(ソフト・ローム層)から採取された資料で、白石純により剥片尖頭器と報告された。「頁岩質系」石材を用いる。実測図からの判断になるが、裏面のリングが走る方向から、一般的な九州の剥片尖頭器とは素材の使い方が逆と判断される。加えて、背面に大きく自然面が残ること、基部と想定される部分の二次加工が大振りで大振りでないことなどから総合的に判断すると、九州の一般的な剥片尖頭器の範疇からは逸脱する部分が多い³⁾。国府系石器群と共伴する可能性が指摘される(富樫1994)。

鷲羽山遺跡(岡山県児島市:採集資料)(鎌木1956)

C南地点からの表土層中の出土品に、剥片尖頭器の可能性が指摘できるサヌカイト製の資料が1点(14)認められる⁴⁾。報文では「縦長flakeの両側縁辺基部に打欠きを持ち先端を尖った剥離のまま残したpoint状の石器」と解説されている。実測図と解説から判断する限りでは、九州の剥片尖頭器と共通した特徴を備えた資料と評価できる。なお、織笠昭も石刃製基部調整ナイフ形石器の全国的動向を図示する際、当該資料に触れている(織笠1992)。

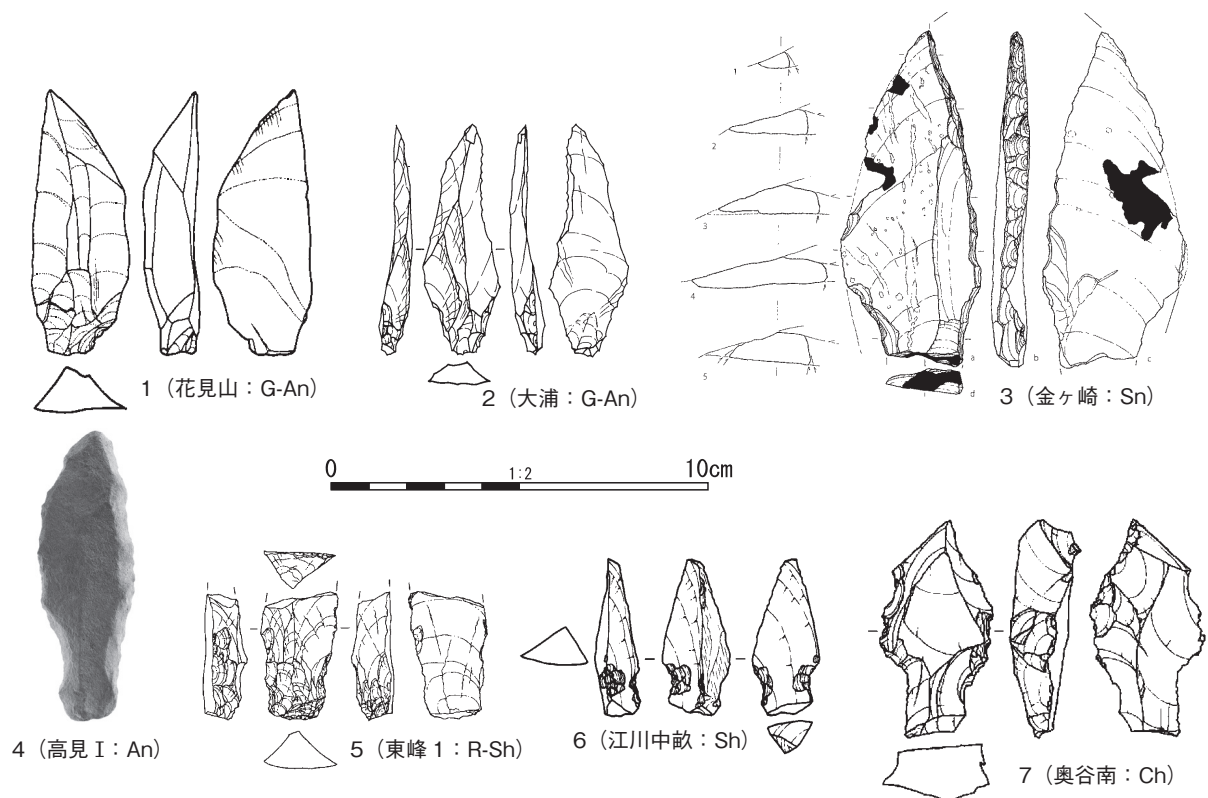
(2)四国地方(第2図)

花見山遺跡(香川県坂出市:発掘資料)(廣瀬他1980)

1が剥片尖頭器と報告されたが、佐藤良二は「おそらく剥片剥離作業時における打面縁調整」と評価している(佐藤1982)。

大浦遺跡(香川県坂出市:発掘資料)(秋山他編1984)

張龍俊は四国における剥片尖頭器出土遺跡の一つとして、当該遺跡を挙げる(Chang2013、張2017)。具体的にどの資料を指すのかは示されていないが、報文において該当しそうな資料を抽出したのが2である。この資料についても、織笠昭が石刃製基部調整ナイフ形石器の全国的動向



第2図 四国地方の剥片尖頭器および関連資料

を図示する際に触れている(織笠前掲)。佐藤良二は2も含めて当該遺跡の類似資料を基部加工ナイフ形石器の範疇に含めて理解した(佐藤前掲)。

金ヶ崎遺跡(愛媛県今治市:採集資料)(兵頭・綿貫2019)

高橋幸意コレクションにおいて、「有茎剥片尖頭器」と報告されたサヌカイト製資料が3である。右側縁全体にわたる二次加工が素材剥片の形状を大きく切り取り、素材が石刃や縦長剥片ではないことが察せられる。基部は折損するが、ある程度明確に抉りを入れていたものと思われる。

高見 I 遺跡(愛媛県伊予市:発掘資料)(沖野他編2018)

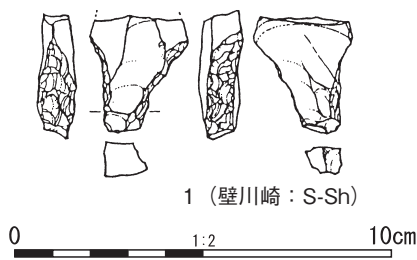
AT濃集層(Ⅱ層)下位のⅢ層から、黄褐色に風化した安山岩製の4が確認された⁵⁾。石刃を素材とし、残置された打面は単剥離面打面と推測される。両側縁に調整加工が巡るが、基部の作出の在り方、素材、サイズなどの諸特徴から、隣接する九州の剥片尖頭器と関連する可能性が高いと判断する。

東峰遺跡第1地点(愛媛県伊予市:採集資料)(沖野編著2012)

5は赤色珪質岩ないし赤色チャート製で上半を大きく欠損する。実測図から判断する限り、厚めの縦長剥片を用い、基部の抉りは浅い。全体形状としては長楯2の例(第1図1)と類似する印象を受ける。最終的には実見を経て判断したいが、技術形態的には九州における剥片尖頭器の変異の幅に含められる特徴を看取する。

えかわなかぜ
江川中畝遺跡(高知県四万十市:採集資料)(木村2003b)

6は今城宗久により採集され、頁岩製のナイフ形石器と報告された。木村剛朗は「形態的には九



第3図 近畿地方の剥片尖頭器

州地方に普遍的な剥片尖頭器の部類に入る」とし、「剥片尖頭器文化(九州)の影響下によって出現した、いわば重流の剥片尖頭器」と評価した。実測図から判断する限りでは、縄文時代の縦型石匙に類する石器である可能性も看取でき、現時点では積極的な評価は控える。

奥谷南遺跡(高知県南国市:後世遺構出土か)(松村・山本編2001)

7は「2次加工により尖頭部を形成する剥片石器」として報告され、JPra-DBでは剥片尖頭器の列に△印が記された資料である。チャート製で旧石器時代の所産と考えられるが、石刃素材ではない。実見の結果からも、剥片尖頭器には該当しないと判断した。

(3)近畿地方(第3図)

壁川崎遺跡(和歌山県御坊市:採集資料)(中原1988a・b・2014)

日高平野周縁の海岸段丘面に形成された遺跡であり、剥片尖頭器関連資料が1点ないし2点報告されている。周辺の地質を反映し、採集資料の使用石材に占める珪質頁岩の比率が高い。1もこの石材を用いており、中原正光によって「剥片尖頭器(有舌ナイフ)に類似する資料」とされた。なお、松藤和人も剥片尖頭器の類例として当該遺跡を挙げる(松藤1989)。

(4)中部地方(第4図)

東裏遺跡高速道路第2地点(長野県上水内郡信濃町:発掘資料)(土屋・谷編2000)

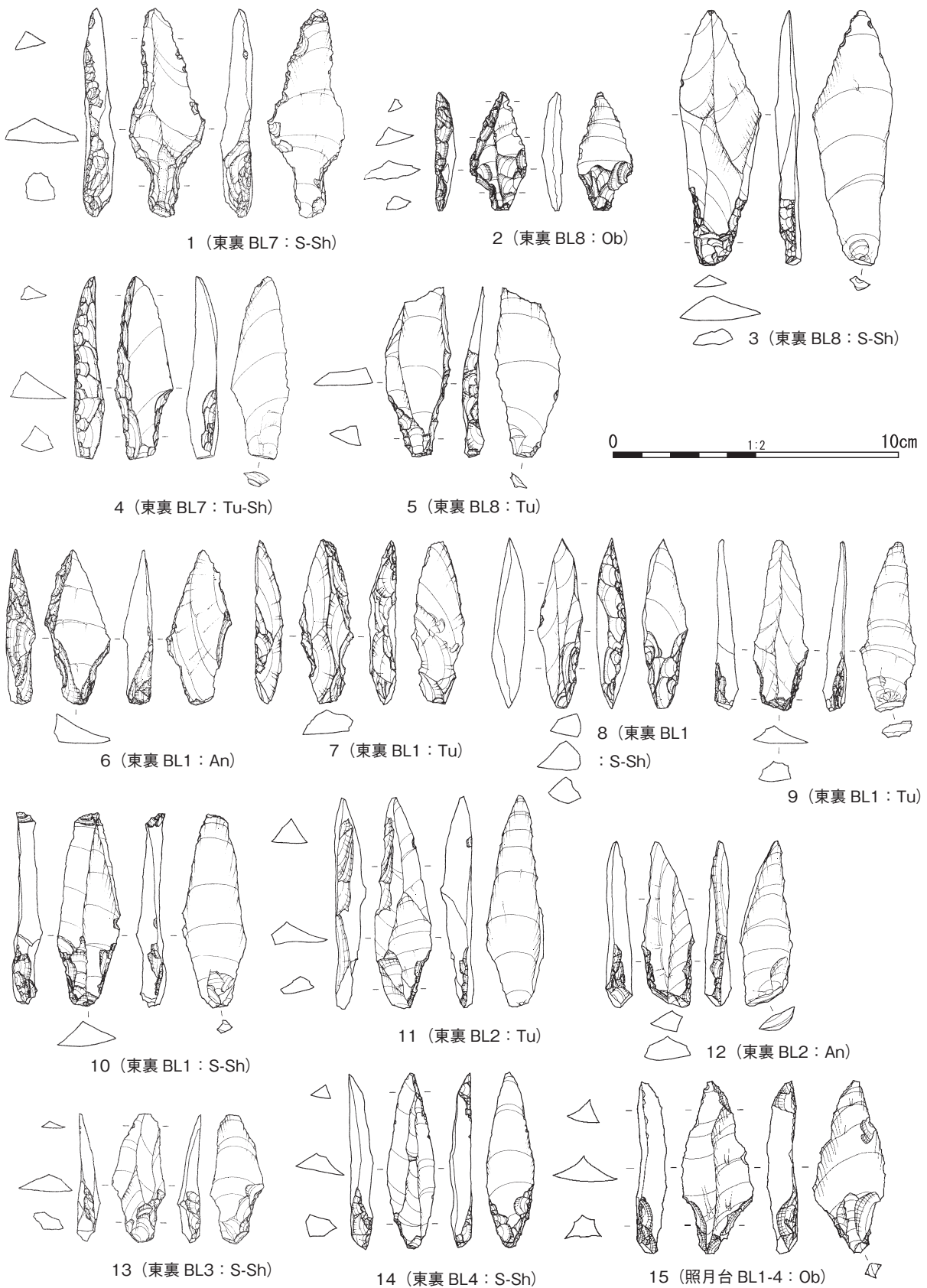
第7・8ブロックから「剥片尖頭器」と報告された資料がそれぞれ1点ずつ出土した。他のブロックなどから出土した基部加工の「ナイフ形石器」にも、形態的に類似する資料が認められる。いずれのブロックも自然流路の範囲にかかって形成され、二次的な遺物の移動は免れないが、著しい摩耗などは観察されないことから、一定のまとまりが維持された可能性が指摘される。

剥片尖頭器として報告された第7ブロックの1は、素材である石刃の打面側の両側縁に二次加工を施し、打面も除去して明確な基部を作出する。左側縁上半にも二次加工を施す。同じく剥片尖頭器とされた2は第8ブロックからの出土で、素材として黒曜石の縦長剥片を縦に用いる。基部の扱いは右側縁では弱く、左側縁は全体に腹面側からの二次加工が入る。基部裏面に平坦剥離を入れる点は注目される。

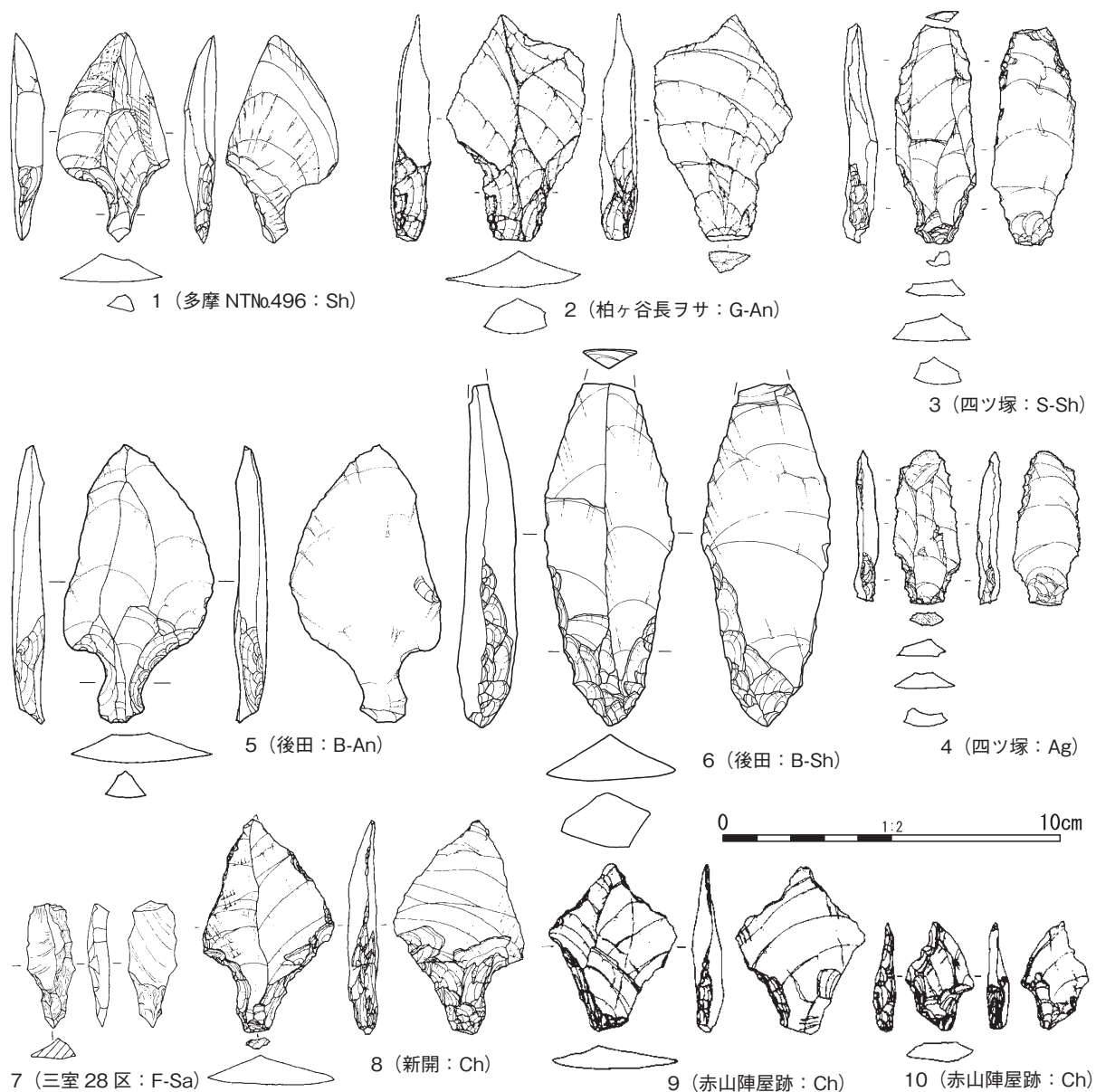
「剥片尖頭器」として報告された以上2点は、単体としてみれば確かにそう呼ばれてよい特徴を備えている。ただし、報文でもこれらの資料を基部加工ナイフ形石器の範疇で理解できる可能性を指摘しているように、参考として図示した他ブロック出土の資料群(3~14)と比較した場合に技術形態上の共通性も強く看取される。

照月台遺跡(長野県上水内郡信濃町:発掘資料)(谷編2004)

15は黒曜石製(蓼科冷山群)の石刃を素材とし、比較的広かったと推測される石刃の打面を加工により大きく除去している。右側縁先端にもブランディングを施し、鋭利な先端を作出する。裏面基部にも平坦剥離が認められる。報文では「器種的には剥片尖頭器とすべきであろうか」と記載される。



第4図 中部地方の剥片尖頭器および関連資料



第5図 関東地方の剥片尖頭器および関連資料

(5) 関東地方(第5図)

多摩ニュータウンNo.496遺跡(東京都八王子市:発掘資料)(舘野1999)

第4文化層第7ユニットからの出土資料1点が、「剥片尖頭器類似石器」として報告された。1は「暗褐色で光沢のある頁岩」製で、同一母岩と推定される剥片1点とともに搬入された可能性が指摘されている。素材は石刃・縦長剥片ではなく、求心状の石核から剥取された可能性が高い。打面は除去されるが、復元される剥離軸と器体軸の関係からすると、むしろ今峠型ナイフ形石器に近い技術形態と評価できる。

柏ヶ谷長ヲサ遺跡(神奈川県海老名市:発掘資料)(堤編1997)

第Ⅸ文化層(B2L中部)から出土した2は、「黒色安山岩の縦長剥片を素材とし、いわゆる剥片尖

頭器にも類似した基部加工のナイフ形石器」と報告された。打面は残置されるが、自然面打面である点は、九州の剥片尖頭器の趨勢とは異なり注目される。当該資料が出土した10号ブロックには、他に基部の挟りの弱い基部加工ナイフ形石器、切出形とも呼びうる黒曜石製の二側縁加工ナイフ形石器等が含まれる。

四ツ塚遺跡(千葉県山武市:発掘資料)(西口他編2001)

木崎康弘が、後期旧石器時代前半期における「臨機的発生」の一例として3・4を採り挙げた(木崎2005)。報文ではいずれもナイフ形石器とされる。3は珪質頁岩製だが、小形品の4はメノウを用いる。

後田遺跡(群馬県利根郡月夜野町:発掘資料)(麻生編1987)

5は黒色安山岩製で、報文では「特徴あるナイフ形石器」と言及される。縄文時代の石匙の可能性も考慮されたようだが、後世遺物の混入の可能性は考え難いこと、基部の加工が裏面からのみ施されるナイフ形石器等に一般的な様相であることから、旧石器時代の所産と評価している。木崎康弘は、後期旧石器時代前半期における「臨機的発生」の一例として当該事例も採り挙げた(木崎2005)。他に6のような大形品も含め、石刃・縦長剥片製の基部加工ナイフ形石器が出土しており、5もその技術形態的文脈で理解できる可能性がある。

三室遺跡第28区(埼玉県さいたま市:発掘資料)(青木編1985)

JPra-DBに○が付される。報文を確認し、該当する可能性があると思われたのが7である。細粒砂岩を用いる。本来の包含層からは遊離しており、帰属時期は明確でない。実測図と写真から判断すると、基部裏面加工を施した二側縁加工ナイフ形石器の可能性が指摘できる。

新開遺跡(埼玉県三芳町:発掘資料)(松本他編1982)

8について報告者である榎田誠は「一応ナイフ形石器として分類するが類例を知らない。形状的には九州地方の剥片尖頭器を想起させる」と記載した(榎田1982)。栗島義明も『「剥片尖頭器」に類したもの』と評価する(栗島2005)。実測図と事実記載からの判断では、素材である縦長剥片の平坦打面を残しつつ、裏面基部に集中的に調整加工を施す点が特徴的である。チャートを用いる点は九州では一般的ではないが、次の赤山陣屋跡の事例と同様、この地域の特色と言えるかもしれない。

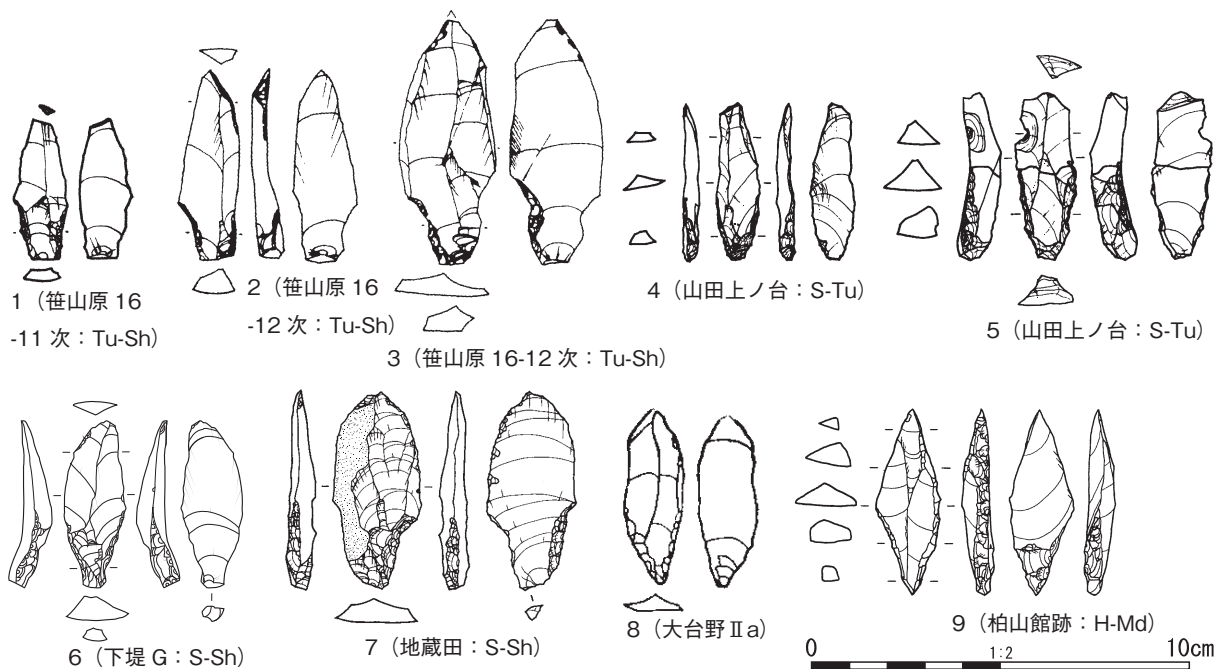
赤山陣屋跡遺跡第2文化層(埼玉県川口市:発掘資料)(金箱ほか編1989)

栗島義明が『「剥片尖頭器」に類したもの』として9・10を採り挙げた(栗島2005)。いずれもチャート製と報告され、実測図のみからの判断では、技術形態的には九州で言う処の今峠型・北牛牧型ナイフ形石器に似る。安山岩を用いた国府系石器群、黒曜石を多用するティアドロップ形の小形ナイフ形石器、小形角錐状石器などが伴う。編年的にはIV層～V層下部段階に帰属すると評価される(小林他2005)。

(6) 東北地方(第6～9図)

笹山原No.16遺跡(福島県会津若松市:発掘資料)(会田2010・2011・2012)

李起吉は第6図1～3の3点を剥片尖頭器と認定した(李2014)。報文では1が「基部整形石器」(会田2011)、2・3が「基部整形剥片尖頭器」(会田2012)とされる。



第6図 東北地方の剥片尖頭器および関連資料(1)

山田上ノ台遺跡(宮城県仙台市:発掘資料)(吉岡・荒井編2003)

仙台市の地底の森ミュージアムで開催された企画展の展示シートで、剥片尖頭器出土遺跡として分布図に落とされ、李起吉によるジングヌル遺跡の研究成果(이기길2011)との比較が行なわれている(東北大学総合学術博物館2012)。第6図4は珪化凝灰岩、同図5は細粒珪質凝灰岩と報告される。実測図から判断する限り、基部加工ナイフ形石器と理解して差し支えないと判断するが、李によるスンベチルゲの分類体系におけるC類の基部加工に該当するために、上述の評価がなされた。

下堤G遺跡(秋田県秋田市:発掘資料)(安田他編2013)

李起吉はガ②型式として第6図6を認定した(李2014)。報文ではナイフ形石器とされる。珪質頁岩を用いる。基部の挟りは弱く、一般的な基部加工ナイフ形石器と判断できる。

地藏田遺跡(秋田県秋田市:発掘資料)(安田他編2011)

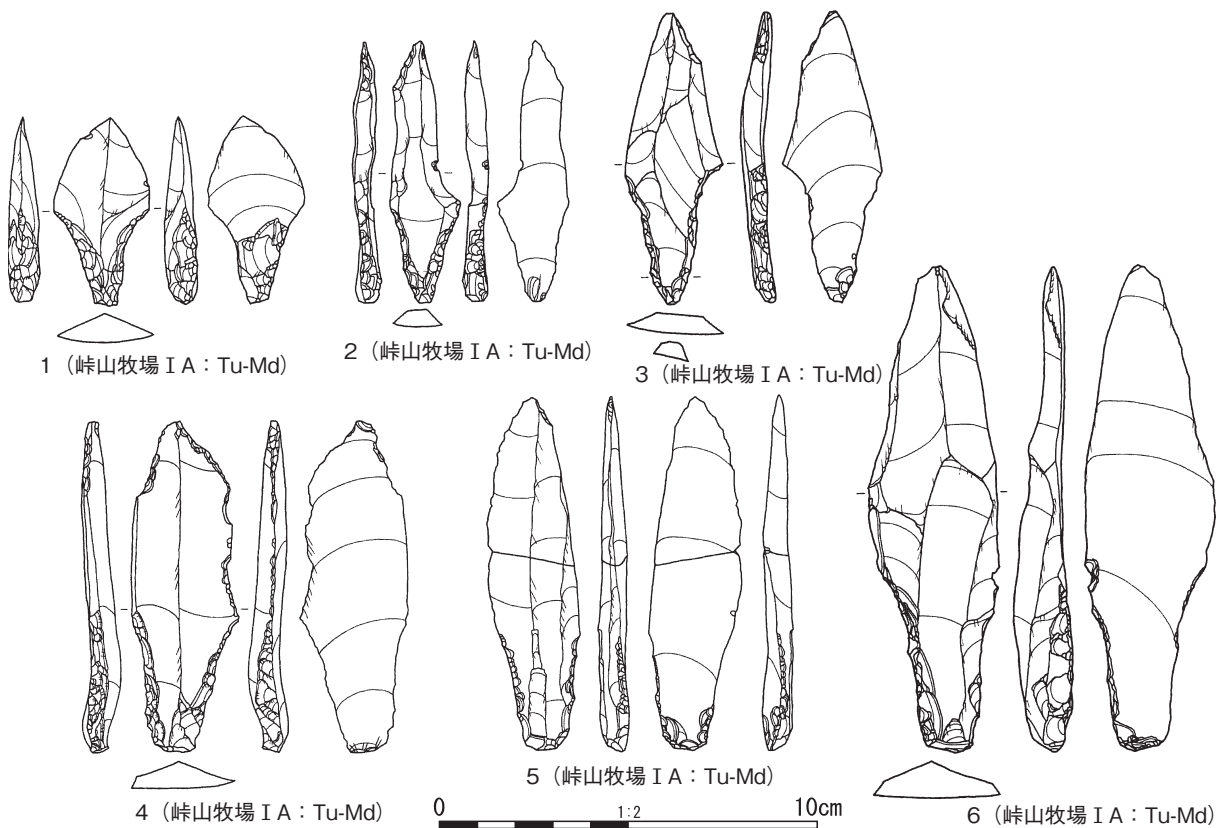
李起吉はガ①型式として第6図7を認定した(李前掲)。報文ではペン先ナイフ形石器とされる。珪質頁岩を用いる。基部の左右側縁の二次加工が表裏を違って施される。

大台野遺跡(岩手県和賀郡西和賀町:発掘資料)(菊池1974)

JPra-DBではIIa層に○が付されるが、どの資料を指すのか特定はできていない。参考に挙げた第6図8については、基部を尖鋭にするための挟りが弱く、基部加工ナイフ形石器群の範疇で理解できる。石材は不明だが、おそらく珪質頁岩か。

柏山館跡(岩手県胆沢郡金ヶ崎町:発掘資料)(高橋他編1996)

JPra-DBではAT上位のIIa下層とAT下位のIIc上・同下層の計3つの文化層に○が付される。報文では第6図9を含めIIa下層にのみ該当する可能性がある資料3点を確認したが、いずれも基部



第7図 東北地方の剥片尖頭器および関連資料(2)

を尖鋭にするための挟りが観察されるものの、二側縁加工ナイフ形石器の範疇で理解できる。

峠山牧場 I 遺跡A地区(岩手県和賀郡湯田町:発掘資料)(高橋・菊池編1999)

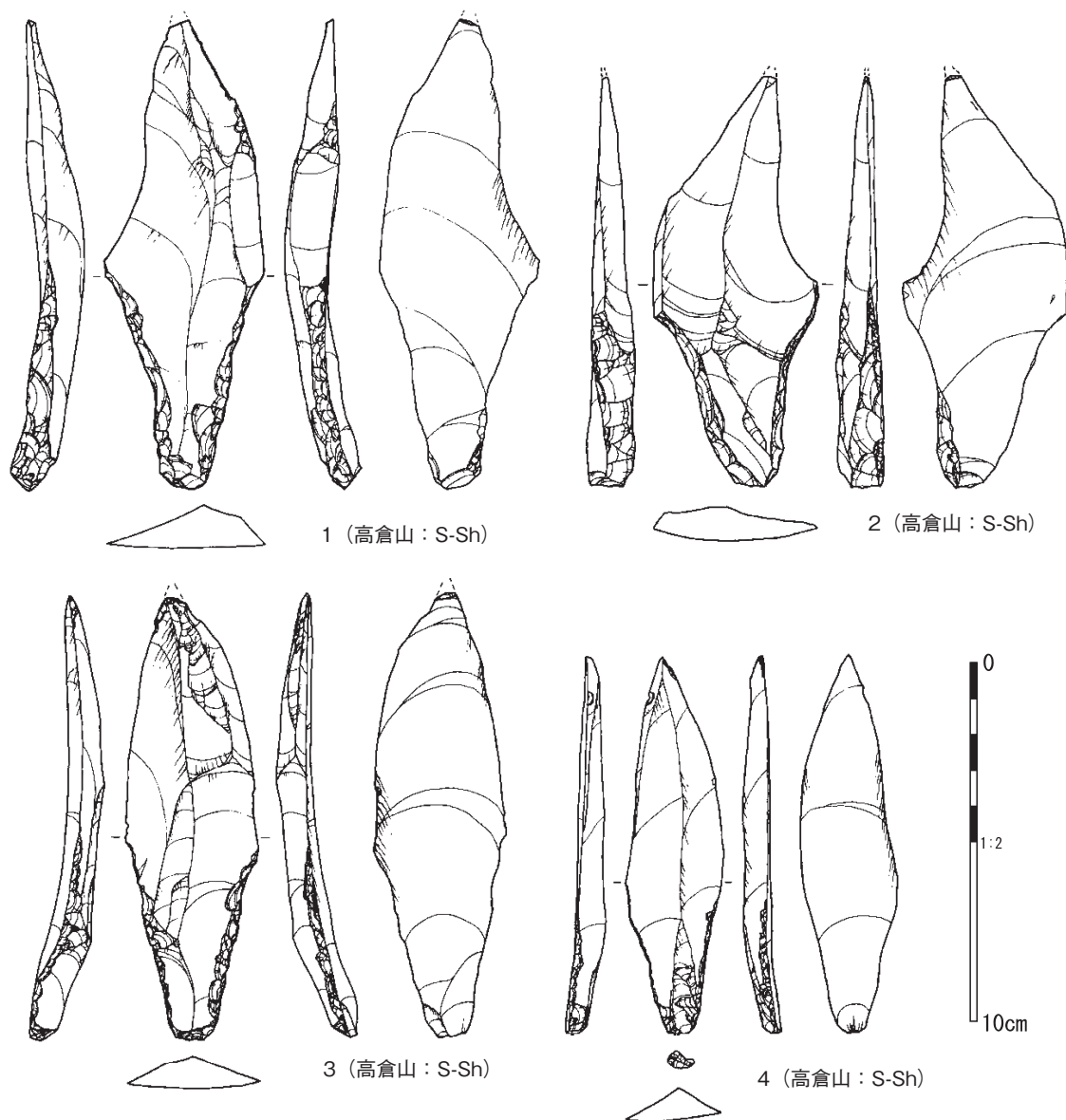
李起吉は18ブロックから出土した11点が剥片尖頭器に分類されると評価し、そのうち6点を例示している(李前掲)。非石刃製の小形ナイフ形石器(第7図1)と石刃製の基部加工ナイフ形石器(第7図2~6)の二つの範疇に大別できる。後者には後述の高倉山や上ミ野Aとも共通する様相を窺える。石材には凝灰質泥岩を用いる。

高倉山遺跡(山形県最上郡舟形町:発掘資料)(鹿又・佐野編2016)

東山石器群と評価される資料群のなかに関連資料の存在が指摘されている。報文ではナイフ形石器 I 類(入念な二次加工で基部を撥状に整形)と分類された資料の一部(第8図1~4)を、李起吉はスンベチルゲガ①・②型式と評価した(李前掲)。なお、洪恵媛は報文の考察において「何よりも韓半島内の石刃石器群の詳細な変遷については未確定であり、高倉山遺跡石器群と同年代の石器群を絞り込むのは難しく、さらに高倉山遺跡および東山石器群との類例は確認しにくい。そのため、現状で高倉山石器群と韓半島の石刃石器群の直接的な関係を把握するのは難しいと考えられる」と述べる(洪2016)。

上^{かみの}ミ野A遺跡(山形県新庄市:発掘資料)(羽石ほか編2004、傳田ほか編2012)

ナイフ形石器として報告された資料中に、剥片尖頭器の類似例と指摘された資料を含むとともに、エンドスクレイパーの製作技術・形態にも剥片尖頭器との関連が言及されている(柳田



第8図 東北地方の剥片尖頭器および関連資料(3)

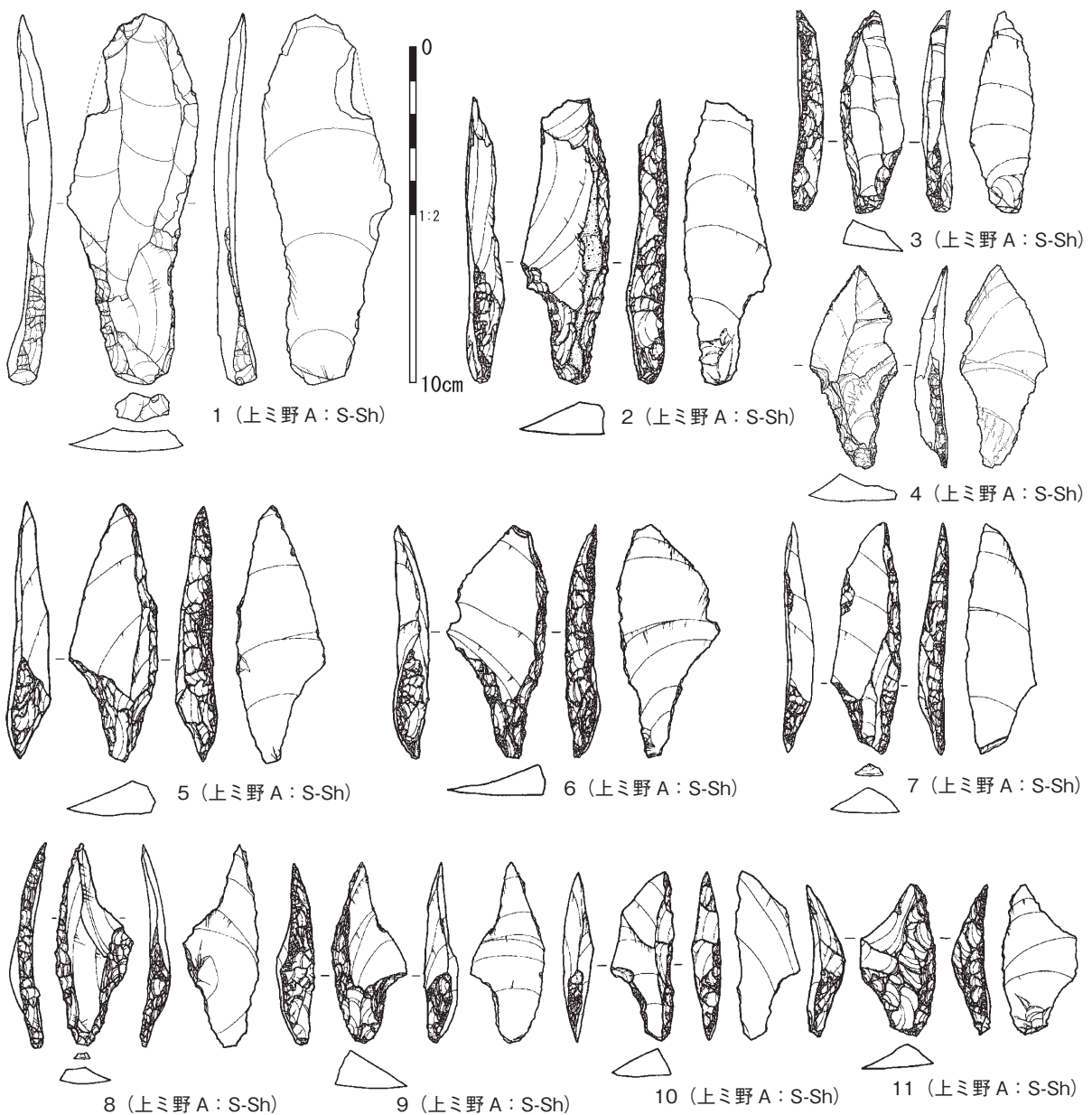
2006)。さらに、ナイフ形石器のなかには、狸谷型ナイフ形石器との類似が指摘された資料を含む。李起吉も第9図1～4を剥片尖頭器として認定した(李2014)。

(7) 北海道地方(第10図)

美利河^{びりか}1遺跡D地点(北海道瀬棚郡今金町:発掘資料)(寺崎編2002)

JPra-DBに○が付される。報文の器種認定では「尖頭器」とされ、峠下型細石刃核と若干の層位差を持ちつつ下位に包含される傾向が看取されるが、平面的には分離できない出土状況と評価された。剥片尖頭器との異同についても検討され、基部の作出方法に九州と剥片尖頭器との違いが指摘されると同時に、1とウスチノフカ例(第11図1)の類似に言及している。

長井謙治はこれらの資料を検討し、ピリカ型有舌尖頭器を設定した(長井2018)。剥片尖頭器様のピリカ1型(1～4)と全面的に粗めの両面調整を施すピリカ2型(6～8)に分け、サハリンで発見



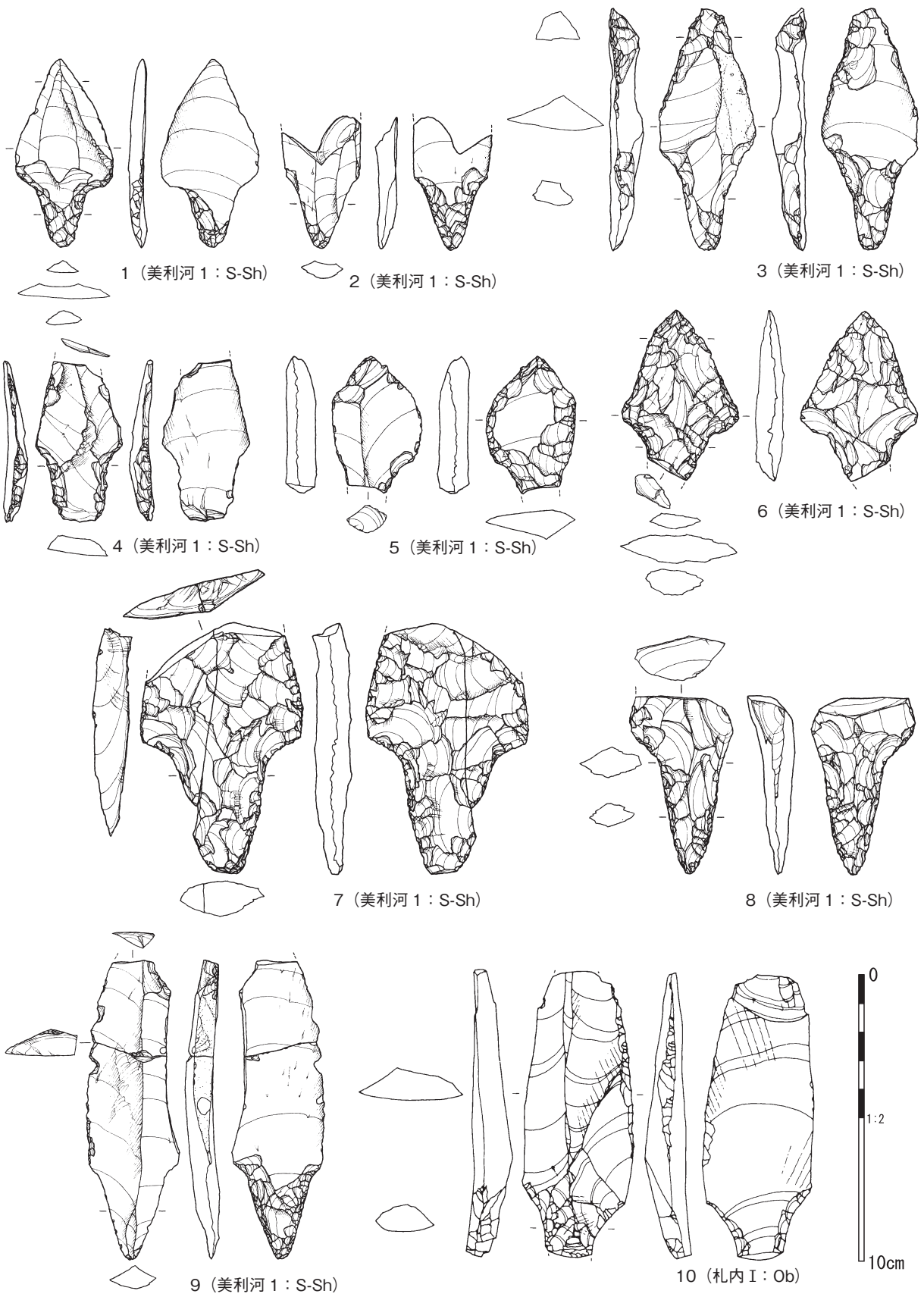
第9図 東北地方の剥片尖頭器および関連資料(4)

されたという剥片尖頭器からピリカ1型、2型の成立を予測している⁶⁾。

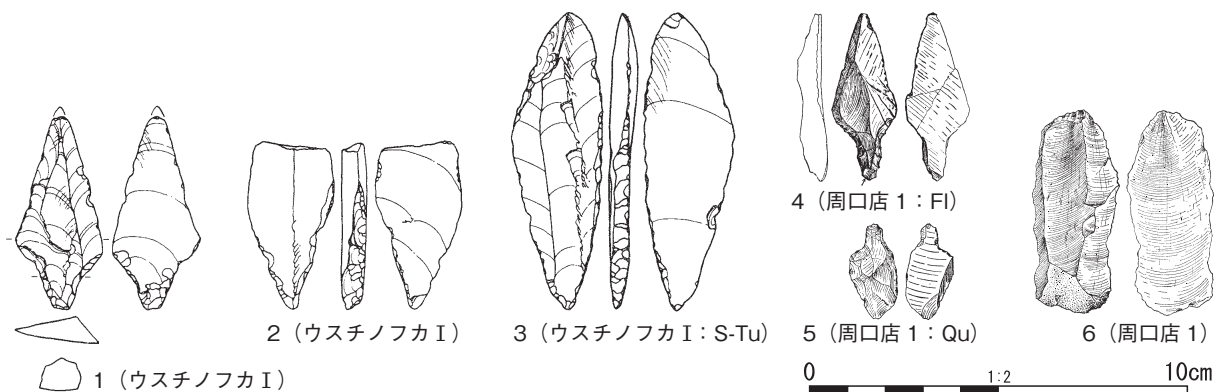
なお、該当資料群が伴うブロック1から採取された3点の試料について、およそ14,000 yr BP代後半の放射性炭素年代(補正年代)が得られている(寺崎編2001)。

札内I遺跡(北海道中川郡幕別町:採集資料)(石橋・大槻1983)

10は報文で「ナイフ石器」として説明されるが、九州の剥片尖頭器との類似を考慮し、論考のタイトルでは「剥片尖頭器」と記されている。実測図・写真の背面構成から、両設打面石核から生産された石刃を素材としたことがわかる。基部は折損しているようだが腹面側からだけでなく、背面側からも二次加工を施し、基部断面がレンズ状を呈する点は注目される。共伴遺物はなく、出



第10図 北海道の剥片尖頭器および関連資料



第11図 ロシア・中華人民共和国の剥片尖頭器および関連資料

土層位からの地質年代の特定も困難であるが、技術形態的には美利河1の資料群と共通する部分も窺える。黒曜石を用いる。

(8) ロシア・中華人民共和国(第11図)

ウスチ・ジュクタイ遺跡(ロシアジュクタイ河上流域)(崔他2017)

崔哲慇らがウスチノフカと併せ、ロシアの事例として分布図にドットを落としている。付された実測図からは端正な石刃を素材として、その打面側を基部に配置し、主に背面側からの二次加工で基部を作出しているように窺えるが、詳細が不明であり、図示はしていない。

ウスチノフカ I 遺跡(ロシア沿海州:発掘資料)(木村1997)

1980年代後半からしばしば取り上げられてきた有名な1(松藤1987、加藤1989)を含め、木村英明は剥片尖頭器として2点を挙げる。2は薄手の石刃ないし縦長剥片を素材とするようだが、小畑弘己の図示では背面左側の広い面は自然面として表現されている(小畑2004)。1の素材となった石刃ないし縦長剥片は打面側の器厚が大きく、基部の断面が略円形を呈する点は美利河例との比較の意味でも注目される。裏面にも若干の二次加工を施す。参考として挙げた3は木村が「ナイフ様石器」、加藤晋平が「ナイフ形石器」と評価したもので「硅質凝灰岩」製と報告されている(加藤1984)。写真からの判断では、1も同質の石材か。小畑はコノニエンコらの編年研究を参照して、2・3(ウスチノフカ I 下層)から1(同上層)という変遷を想定している。

周口店遺跡第1地点(中華人民共和国河北省:発掘資料)(裴・張1985)

4は研究史上しばしば剥片尖頭器に類する資料として採り挙げられ(加藤1989b、清水2000)、最近も韓国・中国の研究者が分布図に落としている(崔他前掲)。加藤晋平は、不明な点が多いと評しつつ、北京原人が製作したとされる石器類がもっぱら石英を使うのとは対照的にこの石器にはフリント(燧石)が用いられること、洞窟堆積物の最上部から出土したことなども考慮し、「周口店UPI石器群」と積極的な評価を示した(加藤前掲)。しかしながら、裴文中からは5と同じ範疇の「長尖石錐」と分類し、尖頭器(有柄尖頭器)の範疇では捉えず、尖頭器とすれば柄に相当する部分を上にして実測図を提示している。参考として挙げた6は加藤が周口店UPI石器群に関連して言及した石刃状剥片である。

3. 「剥片尖頭器」の地域差と認定をめぐる課題

前項までに、橘昌信や清水宗昭らによる認定と名称の提唱(橘1970、高木・清水1971、清水1973)以降、九州のみならず北海道も含めた列島の全域で「剥片尖頭器」の探索と分布の拡がりが増進されてきたことが跡付けられた。そして、当然予想されたように、その内容は地域性を如実に示している。大まかには、次のように大別できるだろう。

グループⅠ：半島のスンベチルゲ石器群ないし九州の剥片尖頭器石器群と直接的な関わりを持つ可能性が高い一群。宇部台地資料群や高見Ⅰが該当するほか、壁川崎もこの範疇に含められる可能性がある。

グループⅡ：関東のAT上位石器群に散発的に認められる資料群(多摩ニュータウンNo.496・柏ヶ谷長ヲサ・新開・赤山陣屋跡)。一部に国府石器群との関わりが指摘される。

グループⅢ：主として東北日本の石刃石器群(基部加工ナイフ形石器石器群)に伴う、またはそれとの関わりが強く示唆される一群。東北地方の資料群に加え、中部(東裏)・関東(四塚・後田)の資料も含み、詳細は不詳だがウスチノフカⅠ下層も含まれる可能性を指摘したい。年代的にはAT降灰を挟んで長く認められ、AT上位には国府石器群など西南日本の石器群との関わりが指摘されている(東裏・樽口・上ミ野A)。

グループⅣ：北海道以北に分布し、細石刃石器群との編年的近接性が示唆される一群。美利河Ⅰと札内Ⅰに加え、ウスチノフカⅠ上層にもその可能性が指摘できる。

九州の剥片尖頭器石器群、半島のスンベチルゲ石器群との比較や、術語・用語の概念的整理に関する本格的な検討は本稿(Ⅱ)に譲るとして、ここでは上記した四つのグループの評価について大まかな見通しを述べておく。

グループⅠのうち宇部台地資料群の評価については、三浦文夫が予測する「宇部・豊前・周防灘遺跡群」(三浦2016)または「豊前・宇部洪積台地遺跡群」(三浦2020)の実証的検討が重要となる。宇部台地の資料群は、九州の剥片尖頭器石器群に混ぜても全く違和感のないものと、裏面基部加工が目立ち、素材剥片の打面を除去して基部を狭小に作出するものの二者に大別できる。後者の特徴は、半島のスンベチルゲ石器群に共通する側面もあれば、九州の剥片尖頭器石器群でも後半ないしこれに後続する角錐状石器石器群に伴う基部加工尖頭器に共通する側面もある。また、九州では類例のない、姫島産ガラス質安山岩を用いる九州的な剥片尖頭器の存在も見逃せない。姫島を遊動領域の南端として活動した地域集団の存在を予測させるからである。

グループⅡについては、基部が尖鋭で、上半部が幅広い形態が目立つ。ただし、これらを同一の範疇にまとめて理解できるかは、量的な保証も乏しく現段階で評価するのは困難であろう。主にグループⅢの検討で論点となる国府石器群の拡散との関わりで、触れるにとどめる。

グループⅢは、九州の大形品に匹敵するサイズの尖頭器を石刃石器群の伝統において製作する点で注目される。東山型ナイフ形石器との関わりについて、確認しておく必要がある。また、先述したように国府石器群の北上と絡めて言及されてきた経緯を踏まえ、編年的枠組みにおける剥片尖頭器石器群・スンベチルゲ石器群との関わりの有無や程度について検討しなければならない。上記に加え必須となるのは、剥片尖頭器とスンベチルゲの術語それぞれが指示する意味内容につ

いての議論である。洪恵媛が指摘するように両者には重なる部分はあるものの、本質的には異なる概念である(洪2018)。前者は純粋な列島内での自生の産物ではなく、後者からの影響の下に成立したとの立場を筆者はとるが(松本2020)、「剥片尖頭器」の用語は本稿が企む分布図の腑分けを終えるまでは、厳密には九州に限定して用いるのが適切と考える。これは、いわば「剥片尖頭器」の概念を型式論的に扱うスタンスだが、特定の時空間とは切り離れた技術形態論的な「剥片尖頭器」の規定もむろん成立しうる。肝要なのは、北東アジアの「剥片尖頭器」分布図に落とされた点の一つひとつが、いずれの立場で規定されたものなのかを峻別することである。いずれにせよ、精緻な概念整理が必要な研究段階に来ているのではないか。

グループⅣの評価も、今触れた課題と無関係ではない。美利河1やウスチノフカⅠ上層の年代観は比較的新しく、始良火山噴火のほぼ直後に展開し2,000年程度存続して収束した九州の剥片尖頭器石器群の展開(松本前掲・印刷中)とは、直接的な関係を持つ可能性はきわめて低い。とすれば、長い存続期間を持つ半島のスンベチルゲ石器群の拡散における沿海州ルートが視野に入るが、両者は技術形態的に共通点が少ない。この点をどう評価するかも課題の一つとなろう。

これらの課題群については、本稿(Ⅱ)においてより詳しく検討し、問題の所在をいっそう明確にしたうえで、「剥片尖頭器」分布図の可視化とその今日的評価を達成したいと思う。

謝 辞

本稿企画の発端は愛媛県高見Ⅰ遺跡から出土した1点の剥片尖頭器であった。きっかけと多岐にわたる御助言・御協力を頂いた多田仁氏をはじめとする愛媛県の考古学研究者の方々に深く感謝申しあげる。本来、可能な限り実資料の観察を経たうえでの脱稿を志したが、折りからのコロナ禍で多くを断念せざるをえなかった。間隙を縫っての宇部台地資料群の資料調査は、三浦文夫氏の御厚意により実現し、同道された伊藤栄二・沖野誠両氏との議論からは啓発されるところが多かった。調査旅行は断念したが、和歌山県については中原正光氏から情報を提供いただいた。実見から随分時間が経ってしまったが、東北大学所蔵の資料見学では柳田俊雄・鹿又喜隆・佐野勝宏の先生方にお世話になった。他にも多くの方々のお世話になり、御助言・御協力を頂いた。御名前を挙げ、感謝申しあげる。

池谷信之・石貫弘泰・伊藤栄二・岩谷史記・沖 憲明・沖野新一・沖野 誠・沖野 実・
遠部 慎・鹿又喜隆・小南裕一・佐野勝宏・多田 仁・張 龍 俊・長井謙治・中原正光・
中村雄紀・前嶋秀張・三浦文夫・柳田俊雄・綿貫俊一(敬称略・五十音順)

(2020年9月7日)

註

1) JPRA-DBに言及された遺跡のうち、次に列挙するものは、挙げられた参考文献にあたった限りで該当する対象が確認できなかったため、本文中では触れていない。

おおかみあな 狼穴洞穴遺跡・かくいじまかいのまえ 鹿久居島貝ノ前遺跡(岡山県備前市)(岡本・西川1981a・b)、上之台遺跡第2次調査区(東京都世田谷区)(世田谷区遺跡調査会編1984)、吉岡遺跡群D区(神奈川県綾瀬市)(白石・加藤編1996)、殿山遺跡第2次調査(埼玉県上尾市)(上尾市教育委員会1991・織笠ほか編2004)、御淵上遺跡A地点(新潟県三条市)(中村

1971、中村・中島・松井1973)、岩脇遺跡(岩手県北上市)(大渡編1996)

個別研究等で言及された次の諸遺跡も、該当する対象を特定できなかったため、本文中に触れていない。

・上野原遺跡(山口県宇部市)：日本旧石器学会のホームページ上、「宇部台地の遺跡群」の解説中に剥片尖頭器出土遺跡の一つとして挙げられるが、おそらく白土遺跡を指したものか(藤野：2020年7月閲覧)。

・藤尾遺跡(山口県山口市)：張龍俊が中国地方の剥片尖頭器出土遺跡(ただし「富士尾遺跡」と表記)の一つとして挙げた(Chang2013, 張2017)が、報告(山口県旧石器文化研究会1996、1997a・b、1998)では該当する資料は確認できない。

・大野平遺跡(高知県四万十市)(清水2000)：遺跡は1998年に今城宗久により発見され、1999年に多田仁によりナイフ形石器2点の存在が確かめられた(木村2003a)。実測図から判断する限り、剥片尖頭器に類する特徴を備えていない。おそらく清水の記述は、近隣に所在の江川中畝遺跡から採集されたナイフ形石器を指したものか。両遺跡間は200mを隔てるにすぎない。

上記以外で実測図を掲載していない遺跡は下記の通りである。

・碁石遺跡(岩手県大船渡市)(芹沢1974)：「剥片尖頭器」の術語が用いられるが、本稿の文脈とは異なる概念規定に基づく記述であり、検討の対象から外した。

・土生池遺跡(和歌山県有田郡有田川町)(中原1994・2003・2014)：中原正光氏から、基部加工のナイフ形石器の範疇で理解しうるとの御教示を頂いた。いずれ実見を経て判断したい。

なお、次の諸遺跡は文献の渉獵が間に合わず典拠となる文献にあたれなかったため、今回は検討対象とできなかった。なお静岡県内の類例探索では池谷信之・中村雄紀・前嶋秀張各氏のお手を煩わせ、中村氏からは桜畑上遺跡第Ⅲ文化層の剥片尖頭器類似例の存在について御教示頂いた。あわせて続稿で触れたい。

・城之平遺跡(長野県)(宮坂1966)：館野孝による言及があるが(館野編1999)、文献も含め詳細は不明である。

・西大曲遺跡(静岡県沼津市：発掘資料)(鈴木他編1980)：JPRA-DBではBB I (第 I 黒色帯)からの出土として○が付される。

・清水柳北遺跡(静岡県沼津市：発掘資料)(鈴木・関野編1990)：JPRA-DBでは中央尾根のYL(休場層)からの出土として○が付される。

・高井戸東遺跡(東京都世田谷区)：木崎康弘が剥片尖頭器の東方への伝播を論題として挙げ、当該遺跡の事例に触れている(木崎2005)。

・江川南遺跡第11地点(埼玉県ふじみ野市)(梶原・桜井編2005)：JPRA-DBに○が付される。

・樽口遺跡(新潟県村上市)(朝日村教育委員会1996)：東北大学総合学術博物館の展示概説(2012)や李起吉(李2014)によって、東北日本の剥片尖頭器分布図にドットが落とされている。

2)資料の評価については、沖憲明氏から詳しく御教示頂いた。

3)ただし、九州の剥片尖頭器石器群も技術形態的にはかなり多様性に富んでおり、個別の属性の出現のありようは単純ではないため、笹畝のような資料も文脈によって剥片尖頭器と判断しう場合もないわけではない。

4)この資料の存在は綿貫俊一氏から御教示頂いた。

5)ただし、出土遺物の様相や放射性炭素年代測定の結果から、遺跡の堆積状況が一筋縄では理解し難いことが指摘されており(遠部・沖野2020)、ここでは分布論的な意義に限り評価する。

6)サハリンの事例については、長井謙治氏から御教示頂いた。ただし、文献の入手が間に合わず、資料の特定や実測図・写真の提示には至らなかった。続稿で触れたい。

参考文献

- 会田容弘2010「笹山原No.16遺跡第10次発掘調査」『第24回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』柳田俊雄 pp.93-102
- 会田容弘2011「笹山原遺跡No.16第11次発掘調査」『第25回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』柳田俊雄 pp.83-95
- 会田容弘2012「笹山原遺跡No.16第12次発掘調査」『第26回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』柳田俊雄 pp.79-88
- 青木義脩編1985『松木・三室・南宿南・馬場小室山遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会
- 秋山 忠・藤好史郎・真鍋昌宏編1984『大浦遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 本州四国連絡橋公団・香川県教育委員会
- 上尾市教育委員会1991『殿山遺跡—第2次調査—』上尾市文化財調査報告第36集
- 朝日村教育委員会1996『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書5 樽口遺跡』朝日村文化財報告書11 朝日村教育委員会
- 麻生敏隆編1987『後田遺跡(旧石器編)』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第15集 群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 安蒜政雄2005「剥片尖頭器、湧別技法、黒曜石—日本海を巡る旧石器時代の回廊—」『考古学ジャーナル』 No.527 ニューサイエンス社 pp.3・4
- 安蒜政雄2007「日本旧石器文化と朝鮮半島」『季刊考古学』第100号 雄山閣 pp.23-27
- 安蒜政雄2009「環日本海旧石器文化回廊とオブシディアン・ロード」『駿台史学』第135号 駿台史学会 pp.147-168
- 李起吉(翻訳:洪惠媛)2014「日本東北地域出土のスベチルゲ(剥片尖頭器)の研究 —製作技法、型式、大きさ、年代を中心に—」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.13 東北大学総合学術博物館 pp.1-11
- 이기길2011「진안 진그늘유적의 스펀지르개 연구 - 제작기법, 형식, 크기를 중심으로」『韓國上古史學報』73 韓國上古史學會 pp.5-30
- 飯島武次1975「中国」『日本の旧石器文化』4日本周辺の旧石器文化 雄山閣 pp.19-90
- 石橋次雄・大槻日出男1983「Spfa1二次堆積層中発見の剥片尖頭器」『十勝考古』第6号 十勝川流域史研究会 pp.30-32
- 石丸真一編1987『山陽自動車道かわいけ 河池遺跡』山口県埋蔵文化財報告第106集 山口県埋蔵文化財センター
- 伊藤栄二2014「瀬戸内技法の成立・展開と石材消費—瀬戸内技法の成立とその背景—」に対するコメント—」『中・四国旧石器文化談話会30周年記念シンポジウム 石器石材と旧石器社会 記録集』中・四国旧石器文化談話会 pp.29・30
- 岩谷史記1998「狸谷遺跡V層石器群における特徴的なナイフ形石器について—狸谷型ナイフ形石器の研究(1)—」『肥後考古』第11号 肥後考古学会 pp.81-102
- 大渡賢一編1996『北上遺跡群(1995年度)本宿/岩脇』北上市埋蔵文化財調査報告23 北上市教育委員会・北上市立埋蔵文化財センター
- 岡本明郎・西川 宏1981a「考古資料 一、先土器・縄文・弥生時代」『和気郡史』資料編上巻 pp.1-16
- 岡本明郎・西川 宏1981b「第一章 原始 第一節 先土器時代」『和気郡史』通史編上巻 pp.3-27
- 沖野 実・青野美和・富山亜紀子編2018『高見 I 遺跡2次 —四国縦貫自動車道における(仮称)中山スマートインターチェンジの建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—埋蔵文化財発掘調査報告書第196集 (公財)愛媛県埋蔵文化財センター
- 沖野新一編著2012『赤い旧石器を求めて—肱川流域の謎に家族で迫る—』唐崎旧石器研究会

- 小野田市歴史民俗資料館1998『石器展』
- 小畑弘己2004「沿海州地方の後期旧石器時代末～青銅器時代の狩猟道具の変遷」『極東および環日本海における更新世～完新世の狩猟道具の変遷研究』熊本大学埋蔵文化財調査室 pp.71-97
- 織笠明子・吉田直哉・井関文明・藤田健一・山崎広幸編2004『殿山遺跡 先土器時代石器群の保管・活用のための整理報告書』上尾市文化財調査報告第76集 上尾市教育委員会
- 織笠 昭1992「Ⅱ旧石器時代 2道具の組合せ d ナイフ形石器文化Ⅱ」『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会 pp.22-25
- 遠部 慎・沖野 実2020「伊予市高見Ⅰ遺跡の炭素¹⁴年代測定」『紀要愛媛』第16号 (公財)愛媛県埋蔵文化財センター pp.1-14
- 榎田 誠1982「Ⅲ. 先土器時代の遺構と遺物 3. Kb区の調査 2) 遺物 a. 石器」『新開遺跡Ⅱ』三芳町埋蔵文化財報告12 埼玉県三芳町教育委員会・三芳町みずほ台土地区画整理組合
- 梶原 勝・桜井聖吾編2005『江川南遺跡Ⅱ/神明後遺跡Ⅰ』大井町遺跡調査会報告16 大井町遺跡調査会
- 加藤晋平1984「極東沿海州のナイフ形石器について」『北方科学調査報告：北方圏の自然と文化の研究』第5号 筑波大学 pp.57-62
- 加藤晋平1989a「朝鮮海峡をわたって」『最古のハンター』日本のあけぼの1 毎日新聞社 pp.50-53
- 加藤晋平1989b「中国北部の後期旧石器文化」『季刊考古学』第29号 雄山閣 pp.26-30
- 金箱文夫・辻本崇夫・伊藤 健・吉田健司編1989『赤山本文編第1分冊』川口市遺跡調査報告12 川口市遺跡調査会
- 鹿又喜隆2012「最上川流域の後期旧石器文化の研究2 上ミ野A遺跡第3次発掘調査報告書 第5章第2節 上ミ野A遺跡のA群とB群の同時存在に関する検討」『Bulletin of the Tohoku University Museum』11 東北大学総合学術博物館 pp.97-100
- 鹿又喜隆・佐野勝宏編2016『最上川流域の後期旧石器文化の研究3 高倉山遺跡』東北文化資料叢書第9集 東北大学大学院文学研究科考古学研究室
- 鎌木義昌1956「岡山県鷲羽山遺跡調査略報」『石器時代』第3号 石器時代文化研究会(鎌木義昌1996『瀬戸内考古学研究』河出書房新社所収 pp.13-27)
- 菊池強一1974「大台野遺跡」『日本の旧石器文化』2遺跡と遺物〈上〉 雄山閣 pp.79-95
- 木崎康弘2005「ナイフ形石器文化の展開と剥片尖頭器」『月刊考古学ジャーナル』No.527 ニューサイエンス社 pp.5-9
- 木崎康弘2017「九州石槍文化の成立と「石槍文化」の東方波及」『旧石器時代の知恵と技術の考古学』安蒜政雄先生古希記念論文集 雄山閣 pp.206-215
- 木崎康弘2020「九州石槍文化」再考」『遺跡学研究的地平—吉留秀敏氏追悼論文集—』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会 pp.51-60
- 木村剛朗2003a「17. 大野平遺跡」『南四国の後期旧石器文化研究』幡多埋文研 pp.135-138
- 木村剛朗2003b「18. 江川中畝遺跡」『南四国の後期旧石器文化研究』幡多埋文研 pp.139-143
- 木村英明1997「7 シベリアの細石器(細石刃)石器群」『シベリアの旧石器文化』北海道大学図書刊行会 pp.217-280
- 栗島義明2005「国府系石器群の波及」『県指定文化財 上尾市殿山遺跡シンポジウム 一石器が語る2万年—』埼玉考古別冊8 埼玉考古学会・上尾市教育委員会 pp.236-240
- 小林あい・中野達也・矢口孝悦2005「V層～IV層下部段階の大宮台地について」『県指定文化財 上尾市殿山遺跡シンポジウム—石器が語る2万年—』埼玉考古別冊8 埼玉考古学会・上尾市教育委員会 pp.89-118
- 佐藤宏之2000「日本列島後期旧石器文化のフレームと北海道及び九州島」『九州旧石器』4 九州旧石器文化研究会

pp.71-82

- 佐藤良二1982「備讃瀬戸地域の旧石器文化に関する二・三の問題 -瀬戸大橋建設に伴う発掘調査の成果を中心として-」『旧石器考古学』第24号 旧石器文化談話会 pp.69-85
- 潮見 浩1968「第11章その他の遺跡 第1節常盤池遺跡 3遺物 石器」『宇部の遺跡 宇部市域遺跡群学術調査研究報告』宇部市教育委員会 pp.179-183
- 清水宗昭1973「剥片尖頭器について」『古代文化』第25巻第11号 財団法人古代学協会 pp.375-382
- 清水宗昭2000「剥片尖頭器の系譜に関する予察」『九州旧石器』第4号 九州旧石器文化研究会 pp.95-107
- 白石 純1990「岡山県真庭郡八束村笹畝遺跡第2地点および東遺跡採集の旧石器(追加資料)」『岡山理科大学 蒜山研究所報告』第16号 岡山理科大学 pp.139-147
- 白石浩之・加藤千恵子編1996『吉岡遺跡群Ⅱ 旧石器時代1 AT降灰以前の石器文化 綾瀬浄水場建設にともなう発掘調査』かながわ考古学財団調査報告7 財団法人かながわ考古学財団
- 鈴木裕篤・小野信義・袴田 稔編1980『西大曲遺跡発掘調査概報』沼津市文化財調査報告20 沼津市教育委員会
- 鈴木裕篤・関野哲夫編1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書その2 東尾根の先土器・縄文・古墳・奈良時代の調査/中央尾根の先土器・縄文・古墳時代の調査』沼津市文化財調査報告書48 沼津市教育委員会
- 須藤隆司2010「有柄尖頭器・国府型尖頭器・三稜尖頭器 -狩猟具形態の構造と地域社会の構造変動-」『旧石器研究』第6号 日本旧石器学会 pp.55-84
- 世田谷区遺跡調査会編1984『上之台遺跡Ⅰ・大蔵遺跡』世田谷区教育委員会
- 芹沢長介編1974『碁石遺跡』社教シリーズ第17集 大船渡市教育委員会
- 高木正文・清水宗昭1971「熊本県玉名郡菊水町発見の先土器時代遺物について」『九州考古学』第41～44号 九州考古学会 pp.2-6
- 高橋義介・菊池強一編1999『峠山牧場Ⅰ遺跡A地区発掘調査報告書 東北横断自動車道秋田線関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第291集
- 高橋與右衛門・羽柴直人・菊池強一編1996『柏山館跡発掘調査報告書 厚生年金施設サンピア金ヶ崎埋蔵文化財発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第242集
- 多田 仁1997「中・四国地方における角錐状石器の様相」『九州旧石器』第3号 九州旧石器文化研究会 pp.73-92
- 橋 昌信編1970「宝満川流域の先土器時代」『福岡県南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 福岡県教育委員会
- 館野 孝編1999「No.496遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第73集 東京都埋蔵文化財センター
- 谷 和隆編2004『一般国道18号(野尻バイパス)埋蔵文化財発掘調査報告書2-信濃町内その2-貫ノ木遺跡・照月台遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書62 国土交通省関東地方整備局・長野県埋蔵文化財センター
- 張龍俊2009「韓半島・九州の舊石器時代石器群と文化の交錯」『南九州の旧石器時代石器群-「南」の地域性と文化の交錯』日本旧石器学会第7回講演・研究発表シンポジウム予稿集 日本旧石器学会・九州旧石器文化研究会 pp.63-66
- 張龍俊(翻訳:田中聡一)2017「韓半島と日本列島の有茎尖頭器(スムベチルゲ)」『九州島における石材産地と石刃技法の成立に関する研究』平成25～27年度 日本学術振興会科学研究費(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)研究成果報告書 九州歴史資料館 pp.99-120
- 장용준2010「일본 나이프형 석기의 비판적 검토-연구사와 용어를 중심으로-」『韓國考古學報』74輯 韓國考古學會 pp.118-144
- Chang Yongjoon 2013 'Human Activity and Lithic Technology between Korea and Japan from MIS3 to MIS2 in the Late Paleolithic Peripod' *"Quaternary International"* Vol.308-309 pp.13-26

- 崔哲慇・侯哲・高星2017「朝鮮半島旧石器時代晩期的有柄尖刃器」『人類学学报』第36卷第4期 pp.465-477
- 土屋 積・谷 和隆編2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15—信濃町内 その1—裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡 旧石器時代』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書48 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
- 堤 隆編1997『柏ヶ谷長ヲサ遺跡 相模野台地における後期旧石器時代遺跡の調査』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団
- 寺崎康史編2001『ピリカ遺跡Ⅰ 史跡ピリカ遺跡史跡整備事業に伴う発掘調査報告書』今金町文化財調査報告4 北海道今金町教育委員会
- 寺崎康史編2002『ピリカ遺跡Ⅱ 史跡ピリカ遺跡史跡整備事業に伴う発掘調査報告書』今金町文化財調査報告5 北海道今金町教育委員会
- 傳田恵隆・佐々木智穂・鹿又喜隆・阿子島香・柳田俊雄編2012「最上川流域の後期旧石器文化の研究2 上ミ野A遺跡第3次発掘調査報告書」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.11 東北大学総合学術博物館 pp.1-200
- 東北大学総合学術博物館2012「展示概説web版 シート9・10」『仙台市・韓国光州広域市国際姉妹都市提携10周年記念 氷河期の人類 石器と遺跡から見る仙台と韓国光州』
- 富樫孝志1994「笹畝遺跡第2地点」『瀬戸内技法とその時代』資料編 中・四国旧石器文化談話会 pp.46・47
- 長井謙治2018「有舌尖頭器の起源」『東北日本の旧石器時代』東北日本の旧石器文化を語る会 pp.151-169
- 中原正光1988a「和歌山県下における先土器時代石器の地域色」『旧石器考古学』第36号 旧石器文化談話会 pp.67-74
- 中原正光1988b「日高地方の先土器時代石器群の特性—在地産頁岩を多用する縦剥ぎ基調の石器文化—」『求真報道』巽三郎先生古稀記念論集 巽三郎先生古稀記念論集刊行会 pp.1-11
- 中原正光1994「土生池遺跡」『瀬戸内技法とその時代』資料編 中・四国旧石器文化談話会 pp.104・105
- 中原正光2003a「紀ノ川流域の旧石器文化 瀬戸内系ナイフ形石器文化から九州系細石刃文化へ」『定本 紀ノ川・吉野川 母なる川—その悠久の歴史と文化』郷土出版社 pp.50-52
- 中原正光2003b「和歌山県土生池遺跡での層位的知見」『紀伊考古学研究』第6号 紀伊考古学研究会 pp.22-33
- 中原正光2014「和歌山県における旧石器時代研究の歩み」『紀伊考古学研究』第17号 紀伊考古学研究会 pp.2-16
- 中村孝三郎1971『御淵上遺跡』長岡科学技術館
- 中村孝三郎・中島栄一・松井 寛1973「嵐北の考古」『嵐北—文化財総合調査報告—』新潟県文化財調査年報第十二 pp.1-54
- 西口 徹・鈴木弘幸・宮 重行編2001『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書 松尾町・横芝町四ツ塚遺跡・松尾千神塚群』財団法人千葉県文化財センター調査報告第402集
- 日本旧石器学会2010『日本列島の旧石器時代遺跡 日本旧石器(先土器・岩宿)時代遺跡のデータベース』日本旧石器学会
- 日本旧石器学会『データベース 日本列島の旧石器時代遺跡』Web版(<http://palaeolithic.jp/data/index.htm>)2020年6月4日閲覧
- 裴文中・張森水1985「第二章中国猿人石器分层研究 九、L3の石器」『中国猿人石器研究』中国古生物志总号第168册 科学出版社 pp.182-202
- 羽石智治・会田容弘・須藤 隆編2004『最上川流域の後期旧石器文化の研究1 上ミ野A遺跡 第1・2次発掘調査報告書』東北大学大学院文学研究科考古学研究室
- 広島県教育委員会1983『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4)』
- 廣瀬常雄・真鍋昌宏・西村尋文編1980「Ⅲ 花見山遺跡ホウロク石地区第1次調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅲ)』香川県教育委員会

- 兵頭 勲・綿貫俊一2019「第3章 金ヶ崎遺跡」『高橋幸意コレクション(Ⅰ) 一旧石器・縄文時代遺物(1) 一』愛媛県歴史文化博物館資料目録第27集
- 藤野次史「宇部台地の遺跡群」『日本列島の旧石器時代遺跡』日本旧石器学会(<http://palaeolithic.jp/sites/ubedaichi/index.htm>)2020年7月31日閲覧
- 藤野次史・多田 仁2010「八 中国・四国地方」『旧石器時代 上』講座日本の考古学1 同成社 pp.544-575
- 洪恵媛2016「第8章 考察 第5節 韓半島と日本列島の石刃石器群の関係」『最上川流域の後期旧石器文化の研究 3 高倉山遺跡』東北文化資料叢書第9集 考古学資料 東北大学大学院文学研究科東北文化研究室 pp.76-80
- 洪恵媛2018「東北地方における後期旧石器時代前半期石器群の再考—福島県笹山原No.16遺跡出土の基部加工石器を中心に—」『東北日本の旧石器時代』東北日本の旧石器文化を語る会 pp.289-303
- 松藤和人1987「海を渡った旧石器“剥片尖頭器”」『花園史学』第8号 花園大学史学会 pp.8-19
- 松藤和人1989「朝鮮半島から日本列島へ—剥片尖頭器の系譜—」『季刊考古学』第29号 雄山閣 pp.39-43
- 松村信博・山本純代編2001『奥谷南遺跡Ⅲ 四国横断自動車道(南国～伊野間)建設に伴う発掘調査報告書』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集 (財)高知県埋蔵文化財センター
- 松本 茂2020「フロンティアの発生と再領域化—剥片尖頭器石器群の挙動から—」『遺跡学研究の地平—吉留秀敏氏追悼論文集—』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会 pp.61-72
- 松本 茂 印刷中「狩猟民の再来—剥片尖頭器石器群南進のタイミングと速度—」『中井正幸さん還暦記念論文集』(仮題)中井正幸さんの還暦をお祝いする会
- 松本富雄・榎田 誠・望月精司編1982『新開遺跡Ⅱ』三芳町埋蔵文化財報告12 埼玉県三芳町教育委員会・三芳町みずほ台土地区画整理組合
- 三浦文夫2016「山口県におけるナイフ形石器の遺跡別石材の利用数」『ナイフ形石器・石鏃の遺跡別石材の利用数 宇部洪積台地編』防府考古学研究会 pp.1-7
- 三浦文夫2020『長沢の時代』防府考古学研究会
- 三好元樹2014「近畿・中四国における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』第10号 日本旧石器学会 pp.89-105
- 安田忠市・神田和彦・菊池強一・鹿又善隆編2011『地蔵田遺跡—旧石器時代編—』秋田市教育委員会
- 安田忠市・神田和彦・鹿又喜隆編2013『下堤G遺跡—旧石器時代編—』秋田市教育委員会
- 柳田俊雄2006「東北地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』同成社 pp.141-172
- 山口県旧石器文化研究会1983「宇部台地における旧石器時代遺跡(1) —遺跡群の概要—」『古代文化』第35巻12号 財団法人古代学協会 pp.32-43
- 山口県旧石器文化研究会1985「宇部台地における旧石器時代遺跡(4) —長榊遺跡第2地点・神楽田遺跡・吉田遺跡・南方裏遺跡—」『古代文化』第37巻8号 財団法人古代学協会 pp.24-32
- 山口県旧石器文化研究会1986「宇部台地における旧石器時代遺跡(5) —南方遺跡 その(1) —」『古代文化』第38巻9号 財団法人古代学協会 pp.23-30
- 山口県旧石器文化研究会1989a「宇部台地における旧石器時代遺跡(8) —常盤池遺跡 その(1) —」『古代文化』第41巻1号 財団法人古代学協会 pp.44-51
- 山口県旧石器文化研究会1989b「宇部台地における旧石器時代遺跡(9) —常盤池遺跡 その(2) —」『古代文化』第41巻3号 財団法人古代学協会 pp.50-54
- 山口県旧石器文化研究会1996「宇部台地における旧石器時代遺跡(16) —藤尾遺跡 その(1) —」『古代文化』第48巻6号 財団法人古代学協会 pp.46-52
- 山口県旧石器文化研究会1997a「宇部台地における旧石器時代遺跡(17) —藤尾遺跡 その(2) —」『古代文化』第49巻4号 財団法人古代学協会 pp.43-46

- 山口県旧石器文化研究会1997b「宇部台地における旧石器時代遺跡(18) 一藤尾遺跡 その(3) 一」『古代文化』第49巻10号 財団法人古代学協会 pp.47-52
- 山口県旧石器文化研究会1998「宇部台地における旧石器時代遺跡(19) 一藤尾遺跡 その(4) 一」『古代文化』第50巻2号 財団法人古代学協会 pp.49-53
- 吉岡恭平・荒井 格編2003『山田上ノ台遺跡 第3次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第265集 仙台市教育委員会

愛媛考古学協会

第24号

令和2(2020)年9月30日

編集・発行 愛媛考古学協会 会長 岡田敏彦
